The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中英語ロマンスにおける反ロラード主義？ : Le Bone Florence of Rome とその写本をめぐって（その1）
Author(s)	田尻, 雅士
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2004, 28, p. 135-148
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99283
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中英語ロマンスにおける反ロラード主義？－
Le Bone Florence of Rome とその写本をめぐって（その１）

田　尻　雅　士

１．ロラード・ロマンス・化体説

中世後期のイングランドに Lollards と称される、いわゆる「異端者」たちがいた。オックスフォード大学の神学者 John Wyclif の流れを汲む人々である。キリストおよび聖書のみに権威を認めるウィクリフは、1370年代からローマ・カトリック教会を批判しはじめたが、その主張は教皇権の否定や教会の財産所有、聖地巡礼、聖母および聖人崇敬への批判など多岐に渡った。教義面では、聖餐式においてパンと葡萄酒がキリストの肉と血に全質変化 (transubstantiation) するという正統派カトリックのドグマである化体説を容認しなかった。この最後の点については、本稿の核心となる部分であるので、後でさらに詳述する。1382年になると、カンタベリー大司教はオックスフォード大学の粛清に乗り出した。ロラードたちは転向を迫られるか、さもなくば追放の憂き目にあった。また焚刑に処せられる者もあった。(ウィクリフ自身は粛清の直前に大学を去っていたらしい。) しかし、その後もロラード運動は根強く残り、民衆および下級貴族にも浸透した。ロラード文献を読む非ロラードの人々も少なからずいたという。弾圧と潜行が続いていったが、彼らの思想は初期のウィクリフのそれに比べれば、かなり単純化、過激化していったと言える。例えば、全質変化を否定するのみならず、聖餐式自体に疑義を唱える者も現れた。1500年頃には運動はかなり衰退していたが、宗教改革時まで残滓はあった。事実、ロラードたちは、ボヘミアの Jan Hus の一派とも

に、宗教改革の先駆者にも例えられるのである。一方、忘れてはならないのは、ロラードを徹底的に批判する Thomas Netter や Nicholas Love といった知識人も旺盛に著述していたのであり、ロラード派および反ロラード派の手になるラテン語や中英語の文献は膨大なものである。本稿の目的は、ロラードは直接名指しされてはいないものの、中英語のロマンスおよびその写本に、反ロラード的言説が見られることを指摘し、その意味を考察しようというものである。

Le Bone Florence of Rome ―『ローマの善女フローレンス』―は1400年頃、北部ミッドランド地方ないしヨークシャーで書かれた2,187行よりなる中英語のロマンスであり、原則として aabccbddbeeb と押韻する尾韻 (tail-rhyme) 形式を採っている。この作品を収める唯一の写本は、ケンブリッジ大学図書館所蔵の MS Ff. 2.38であり、15世紀末か16世紀初頭にレスタシャーで制作されたとされる。また、本ロマンスの原典は、多くの中英語ロマンスがそうであるように、フランス語の物語である。直接の原典と言えるかどうかは定かではないが、13世紀初頭の *La Chanson de Florence de Rome* (Nouv. acq. franc., 4192, Bibliothèque Nationale 所収) が英語版に近いとされる。ただし、このフランス語版は 6,410行と英語版の三倍もあり、英語版はかなり縮約されている。しかし単なる縮約とも言えない改変もあり、本稿でもその点に着目していきたい。『ローマの善女フローレンス』は、中英語ロマンスの中では'Eustace-Constance-Florence-Griselda' legends に分類されるが、これは有徳で高貴な主人公（多くは女性）が悪者の奸計により、流謫し艱難辛苦を嘗めるが、神や聖母の計らいで復権するというパターンが基本である。よく知られた作品とは言いがたいので、梗概を紹介しておく―

コンスタンティノープル皇帝 Garcy は Florence への求愛を拒絶され、彼女の父であるローマ皇帝 Otes に攻撃をしかける。ハンガリー王子 Miles と Esmere の兄弟はローマのために戦い、Florence の愛を求める恋敵となる。Otes は殺害される。弟の Esmere は捕虜となる。やがて釈放された彼は Florence と結婚

し、新ローマ皇帝となる。ただし、Garcy を討つまでは寝所を共にしないという条件である。Esmere は討伐にでかける。その間、兄 Miles は別の遺体を弟のものだと偽るなどして、Florence に求愛する。あげくに彼は彼女を監禁するが、事情を知っている Egravayne の告解を聴いた教皇らにより彼女は解放される。今度は Miles が塔に幽閉される。Esmere が勝利を収め凱旋する直前に、Florence は Miles を釈放してやる。Miles は、Florence と Egravayne の不義をでっちあげ彼女を告発するが、Egravayne の証言により疑いは晴れる。皇帝を迎えに行くと偽って、Miles は Florence を森へおびき出す。凌辱されかかるのを神慮でしのぐが、森の中に捨てられる。Sir Tyrry という人物に救われた彼女は、その家の乳母となる。その家に仕える騎士 Machary の求愛を退けるが、彼は Tyrry の娘の喉を掻き切り、ナイフを寝ている Florence の掌中にしのばせることで、彼女を冤罪に陥れる。彼女は再び森に追放される。彼女は処刑されかかっている盗人 Clarebalde を救い、自分の小姓とする。しかし、彼と、ぐるの町奴は Florence を船長に売り渡してしまう。船長に凌辱されかかるが再び神慮で救われ、船は沈没する。Florence はとある女子修道院に辿り着く。癒しの術を備えた修道女としての彼女の名声は広がり、噂を聞きつけた今や業病を患う Esmere、Miles 、Machary 、Clarebalde、船長が修道院にやって来る。悪者四人に罪を告白させてから、彼女は彼らを治療してやる。Esmere は彼らを処刑する。Florence と Esmere はついに結ばれる。[1]

さて、このロマンスの中程に transubstantiation に言及した主人公の科白が二度現れる。当該の箇所をそれぞれ引用する（下線、補筆引用者）－

The pope came as ye may here,
For to crowne Syr Emere,
　And wedd them wyth a rynge.
Sche seyde, ‘Now are ye emperowre of Rome,
The grettyst lorde in crystendome,

And hedd of euery kynge ;
ȝyt schall ye neuyr in bedde me by,
Tyl ye haue broght me Syr Garcy,
For no maner of thynge ;
Or lefte hym in þe felde for dedd,
Be hym Y sawe in forme of bredd,
When þe preest can synge.' (ll.994-1005)[2]

****

And seþyn to Rome þey hym [Syr Sampson] broght,
And tolde Florence worthyly wroght,
That Emere laye there dedd ;
When þat sche had swowned twyes,
And thereaftur syghed thryes,
Sche wepyd in that stedd.
Mylys seyde, 'My lady fre,
Thy councell wyll þat Y wedde þe,
Hyt was my brodurs redd.'
She seyde, 'Y wyll weddyd bee
To a lorde that neuyr schall dye,
That preestys schewe in forme of bredd.

'Furste þen was my fadur slayne,
And now my lorde ys fro me tane,
Y wyll loue no ma,
But hym þat boght me on þe rode,
Wyth hys swete precyus blode,
To hym Y wyll me ta.' (ll.1090-1107)

前者は、フローレンスを娶り、新ローマ皇帝となったエミアに彼女が発する言葉である。夫が亡き父の仇敵であるガーシーを生け捕りにするか、殺すまでは「司祭がミサをあげたとき私がパンの姿で見たお方（キリスト）にかけて」閨を共にしない、というのである。後者は彼女が邪悪な義兄マイルズに言う科白である。サムソン卿の遺体をエミアのそれと偽って、フローレンスに求婚するマイルズであるが、彼女は「私は決して死なないお方、司祭たちがパンの姿で示すお方と結婚します」と言って拒絶する。[3] 第一の科白では、自分や父や祖国に仇なす者への主人公の異例なまでの敵愾心、気丈さが表明されている。彼女はまだ、少々驕慢な面を残した世俗の皇女である。第二の科白は、騙された上のものとはいえ、彼女が作品の最終局面で実際に修道女となることを考えれば重要な言葉である。彼女が次第に世俗と決別していく決意を固めていることが感じ取られる。本ロマンスの編者である Carol Falvo Heffernan も、その版本の中でこのくだりが物語の重要な分岐点であることを指摘している (p. 22)。また両方の科白に共通することであるが、彼女はこれらの誓言や決意表明で純潔を守りぬくことを明らかにしてもいる。もちろん、夫エミアとは最後には名実ともに夫婦となり、フローレンスは有徳の世俗女性としての地位を回復するのであるが。[4] これらの科白が、物語の少なからず重要な局面で発せられていることは確認できたと思う。

Eugen Kölbing は、古フランス語の詩同様、中英語のテキストには化体説への言及は少なく、自分が知るかぎりでは二つしかないと述べている。彼が挙げているのは *Bevis of Hampton* (MS Chetham 8009 所収のヴァージョン) の l. 4303と *Le Morete Arthur* の ll. 3862-63であるが (p. 360) 、これらの箇所では登場人物が聖体を拝領する様子が述べられているだけで、『フローレンス』での言及のされ方とは明らかに違う。しかも、Kölbing は本ロマンスの例を見落としている。[5] 近年、中英語ロマンスに見られる、神および神に係わる語句を含む誓言を研究した Roger Dalrymple は、『フローレンス』に見られる化体説への二度の言及を 'eucharistic tags' と呼び、本ロマンスのみに見られると断言している (p. 22)。さらに重要なことに、Anne Thompson Lee は彼女の

『フローレンス』の版本の中で、これらの 'eucharistic tags' がフランス語版『フローレンス』には見られないと述べている (p. 292)。つまり、これらはイングランドの詩人もしくは写字生のオリジナルである可能性が高いのである。Lee は言葉を継いで、'This seems to be in keeping with the assumption that our poet is familiar with the most common teachings of church doctrine' と述べながらも、'but [the poet is] not nearly so learned in Biblical history as the French author. Indeed the lines sound more like a formula than a doctrinal reference' と判断している (p. 292)。また、Henry Lloyd Vandelinde は、これらを 'formulaic reference[s] to Christ' と呼び、'The references to Christ are secondary to her own concerns and function as affirmations of her self-perceived standing within the cosmos' と述べているが、化体説には触れていない (p. 224)。確かにこれらの詩句は formulaic な要素が強い。しかしフォーミュラには意味的実体はまったく伴わない、という訳ではあるまい。次節以降で述べるように、化体説への言及はかなり意図的に－ありていに言えば反ロラード的立場から－なされた可能性がある。しかし、その前に化体説を巡るロラード派および反ロラード派の言説をもう少し詳しく見てみたい。

化体説の教義が福音書に見られる、最後の晩餐における弟子たちへのキリストの言葉 'Hoc est corpus meum' に基づいていることは言うまでもない。祭壇上のパンと葡萄酒は司祭によって聖別されるとキリストの肉と血に全質変化し、パンや葡萄酒のように見えるものは、実質を伴わない偶有的なるもの (accidents without subject) に過ぎない。そこに存在しているものは神の 'the Real Presence' なのである。しかしウィクリフは Eucharist や 'the Real Presence' を否定したのではない。彼がひっかかったのは 'accidents without subject' であった。アリストテレス的物質観に立つ彼には、パンや葡萄酒の実質が無化されてしまうなどということは、いくら奇蹟を以てしても不可能と思えたのである。したがって、祭壇上にあるのは神の体であり且つパンおよび葡萄酒なのである (transubstantiation ならぬ consubstantiation)、と考えた。また、神の存在も、肉体的な意味での存在というよりも、誤解を恐れずに言えば多分

に比喩的な、スピリチュアルな意味での存在である、というのが彼の考えであったようである。当時のロラード派文献から重要な部分を引用してみようー

> But þis sacrament is boþe brede and Cristis body togedre, as Crist is verre God and verre man ; and, as Cristes manhed suffrid peyne and deþe and ȝitt þe godhed myȝt suffre no peyne, so, þouȝ þis sacrament be corupted , neuerþele[s] þe body of Crist may suffre no corrupcioun.... A Lord! what wurship don þise new heretikes vnto þis sacrament, whenne þei seie þat [it] is not brede, but accident wiþoute subiecte or nowȝte? And if þer be any accident wiþout subiecte as þei seyne, it is wars in kynde þenne is any lumpe of cleye, as clerkis knowen wele. [6]

繰り返しになるが、これらの言説に対する正統派からの反論を要約すると、聖別されることによりパンと葡萄酒はキリストの肉と血に置き変わるのであり（全質変化）、パンや葡萄酒の外観や味（すなわち accidents）は残っていてもその実体はないのであり、祭壇上のキリストの体はマリアから生まれ、今は天にいるキリストの肉体とまったく同一である、ということである（Hudson, ed., p. 142）。さらに、先にも述べたが、ロラード派の主張は次第に単純かつ先鋭的になっていった。祭壇上のキリストの体の存在や聖餐式自体をも否定するようになった彼らは、「鼠は聖別されたパンもされていないパンも見境なく食べるが、もし聖別されたパンが神の体なら、それを食べたりしないだろう」、「神により創造された司祭が創造者たる神を創れる訳はない」、「祭壇上に神が存在するなら、神はこの世に一体何人存在するのか」などと主張した（Hudson, *The Premature Reformation*, pp. 284-85）。

さて、ここで今一度、『フローレンス』の ‘eucharistic tags’ に戻ろう。Lee らはこれを transubstantiation を伴う化体説への言及と考えている訳であるが、見方を変えるとウィクリフが唱えた ‘consubstantiation’ の立場とも矛盾しないとも言える。彼は ‘the Real Presence’ は肯定していたからである。しかし

これはあまりにも穿った見方と言えるだろう。第一に、今も確認したようにロラード派は 'consubstantiation' をも否定するようになり、世間でもロラードとはそういう輩だという認識が定着していた（次節で紹介する反ロラード的教訓話参照）。第二に、1004行目には 'Be hym Y sawe in forme of bredd'、1101行目には 'That preestys schewe in forme of bredd' という句が見られるが、これは聖餐式で司祭がパンを聖別してから持ち上げる際に列席者がそこにキリストの体を「見る」様子を描写している。しかし Richard Rex によれば、ウィクリフは 'the Real Presence' を信じながらも「キリストを見る」という概念を疑問視していたという (p. 45)。ウィクリフは「これは私の体である」というキリストの言葉の「である」について独特の解釈をしており、パンの中に五体を備えたキリストの肉体的存在を見る、というのは彼の考えとは相容れなかった。第三に、初期のロラードが 'consubstantiation' を信じていたにしても、親ウィクリフ派の立場から transubstantiation 擁護と取られるような文言をわざわざ書き込むいわれなどなかったであろう。やはりこの 'eucharistic tags' は反ウィクリフ、反ロラードの観点から書かれたと考えたい。

2．マニュスクリプト・コンテクスト

『ローマの善女フローレンス』は MS CUL Ff. 2.38の中で41番目の作品 (ff. 239v-254r) であるが、28番目の作品 (ff. 54r-55r) に 'A good ensaumple of a lady þat was in dyspeyre' という短い韻文の教訓話がある。まずあらすじを紹介する－

信心深い騎士がいたが、彼の妻は信仰心に欠ける人物であった。彼女は復活祭のミサで聖体拝領を受けたが、聖体を胸に隠して持ち帰った。それを布に包み箱の中に半年間入れておいたが、悪魔の誘惑で悪事をしでかしてしまった。万聖節の時、彼女は聖体を梨の木の根元に埋めたのである。やがてクリスマスを迎え、騎士は客を招いて盛大な宴を催した。客の中には司教もいた。司教が祈りの言葉を述べ、楯持ちが第一のコースを給仕した。すると神の力

により、梨の木に紅白の花が咲き始めた。第二のコースが振る舞われる頃には、騎士の妻は自分が罪を犯したのではないかと不安になってきた。第三のコースが振る舞われると、梨の木は緑の葉をたたえ、実が熟して落ちた。それほど素晴らしい果実はなかった。司教が枝を一本折るように命じ、楯持ちがそうすると、彼の体に血がかかった。キリストがそこに埋められていたからである。司教は急いで梨の木の許に行くと、跪きキリストに祈りを捧げた。そして枝を元に戻すと、それは元通りになった。司教が根元を掘らせると、そこには幼子イエスの姿があった。彼が木を見つめると梨の実は消えてしまった。傷を負った幼子は皆を祝福したが、騎士の妻にはそっぽを向いた。彼女が嘆いて司教に懺悔を申し出ると、司教は告解をするよう諭し、皆のために十字架上で亡くなられた方に思いをいたすよう命じた。司教は僧服を着て、イエスの体を祭壇に運び、祈りを唱えながらパンの中に置いた。そして騎士の妻に改めて聖体を拝領させた。最後に作者のキリストと聖母への祈りが語られる－悪魔の誘惑からお守りください、云々。[7]

作品中には 'That very god was (ys) in forme of bredd'、'Very god in forme of bredd' という句が幾度もリフレインされる。ロラードへの言及は一切ないが、写本のファクシミリの編者の一人である Frances McSparran はこの小品を評して、ヴァーノン写本の説教や Mirk's *Festial* などと並んでおそらくは 'counter-propaganda to Lollard attacks on the doctrine of Transubstantiation' であろうとしている (p. x)。さらに彼女は注で、反ロラードの旗手として化体説擁護の立場から 'lewed lollardes' を激しく攻撃したニコラス・ラヴに言及している (p. xviii, n. 17)。[8] ここでは上述の教訓話の類話として Mirk's *Festial* を取り上げてみたい。John Mirk の説教集であるこの中英語作品（15世紀）には、'De Solempnitate Corporis Cristi' という一章があり、サクラメントに関する narracio が四つ収められている。その内の一つを紹介する－

グレゴリウス教皇の時代、ラズマというパン焼きの女性がいた。彼女は教皇が執り行う聖餐式に使うパンを作っていた。教皇が彼女に聖体拝領を勧めても、彼女はニヤニヤ笑って、「神の体とおっしゃいますが、私が焼いたのですよ」と言うばかりである。残念に思った教皇は、一同の者に奇蹟を願って祈るよう命じた。すると祭壇上の聖体が血が滴る肉に変わっていた。彼女は改心した。人々が再び祈ると、肉は再びパンの姿に戻った。ラズマはその聖体を拝領した。[9]

先程の騎士の妻もラズマも the Real Presence 自体を信じていないようであり、ウィクリフの考えからも逸脱したロラードのように思われる。特に *Festial* に関して言えば、これとは別の narracio にロラードが言及されている(Theodor Erbe, ed., p. 171)。先に引用した McSparran の推定は正鵠を得ていると見てまちがいないであろう。

さて、ケンブリッジ写本に関しては、写字生一人説と二人説がある。一人説を唱えているのはファクシミリの編者の一人、P. R. Robinson である。『フローレンス』のそれぞれ別の版本の編者である Lee と Heffernan、さらにロマンスの写本のカタログを編纂した Gisela Guddat-Figge は二人説を採っている。二人説の根拠は、ff. 93r col. b l. 6-156v. col. b l. 6の部分だけ字体が大きく、行間もゆったりしているので、他の部分とは別の写字生が書いたであろう、というものである。[10] しかし Robinson は、一見異なる写字生によると思われがちな箇所の字体も Anglicana と Secretary が混じった同一のものであり、写本の途中で字が大きくなっているのは、写本を構成する二つのブックレットのそれぞれの書き始め (ff. 3, 161) では詰めて書いていたのが後半部でゆったり書くようになったからだと述べている。このような現象は長期間に渡って写本を筆写する場合によくあることだという (p. xiv)。筆者にはこの件についてコメントする能力はないが、仮に二人説を採るとしても、『フローレンス』と 'A good ensaumple of a lady þat was in dyspeyre' は同一の写字生が書いたことになる点に留意したい。ロマンスを筆写する際に、'eucharistic tags' を

見いだした写字生は、'A good ensaumple' を思い出したかもしれない。しかし、さらにもう一歩踏み込んで、scribal editing の可能性を考えてもよいのではないか。この教訓話が念頭にあり、周囲にロラードの残党も目にしていた写字生が、'eucharistic tags' を加筆したという可能性もまったく捨てきれないと思うのである。McSparran はこの写本の読者層を推定して次のように述べている：'One can easily imagine it [the manuscript] serving for family reading in a pious middle-class household, some items serving for "edification and profit", others "for edification and delight"' (p. vii)。そのような家庭にも、ロラードのシンパサイザーや彼らの主張に興味を示す者がいなかったとは言い切れないが、やはり多くは「異端者」に眉を顰めるような人々ではなかったか。いや、もしロラードに同情的な者がいれば尚更、この写本は読まれるべきだったと言うべきか。この点については、本論文（その２）の最後で再度考察する。

先にも述べたとおり、この写本の制作地はレスタシャーであったと考えられている。Anne Hudson によれば、ウィクリフの思想が比較的早く根づいたのはレスターであり、1382年にはすでにその記録があるという。この地には多くのロラード派の指導者が住みついていた (*The Premature Reformation*, pp. 73-74)。ところが Rex によると、レスタシャーでは1414年以降、ロラードは殆ど見られなくなり、1424年に容疑者が審問を受けたのが最後であったという (p. 89)。しかしながら、再び Hudson に戻ると、16世紀に入ってからも同州にロラードが点在していた様子が描かれているのである(*The Premature Reformation*, pp. 456-57)。ケンブリッジ写本の写字生の周囲にもロラードが一少なくともその残党が一いたことは否定できないのである。[11]

'A good ensaumple' がかなりの確度で反ロラード・プロパガンダであるとするならば、同じ写本にあっても『フローレンス』は極めて implicit な形での反ロラードでしかありえないのは事実である。しかし次節では、'eucharistic tags' 以外にも、反ロラード的要素がこのロマンスに見られることを指摘したい。（次号で完結）

本稿は日本中世英語英文学会第19回全国大会（2003年12月13日、14日、於・東京外国語大学）での口頭発表を大幅に加筆修正したものの前半部である。以下に掲げる参考文献リストには本号掲載分にかかわる文献のみを挙げた。次号で完結する際には、今回挙げたものも含めてすべての参考文献を掲載する予定である。

注

1. J. Burke Severs, gen. ed., p.131の梗概を筆者が翻案したものである。
2. 引用は Carol Falvo Heffernan, ed.による。以下同様。
3. 日本語訳の引用は中世英国ロマンス研究会・訳に拠る。ただし補筆は引用者によるものである。
4. 本作品をフローレンスの「成長の物語」として読んでいるのは Henry Lloyd Vandelinde である (pp.214-34)。
5. Kölbing の言う'Middle-English texts'とはおそらくロマンスに限定しているのであろうが、ジャンルをロマンス以外にも広げれば、化体説への言及はそれ程珍しいとも言えないのではあるまいか。*Pearl* の最終スタンザには'Þat in þe forme of bred and wyn/ Þe preste vus scheweȝ vch a daye' (ll.1209-10；引用は E.V. Gordon, ed.より）という句がある。また、後述するような化体説、反化体説の立場から書かれた文献も枚挙に暇がない。
6. 引用は Anne Hudson, ed.から (pp.110-12)。Emendations は編者による。以降、ウィクリフ派の文献はこの版本から引用する。ただし、これらはウィクリフ自身の文章ではない。
7. 要約にあたっては、Frances McSparran & P.R. Robinson, introd.のファクシミリおよび Charles Henry Hartshorne, ed. (pp.134-43)を利用した。続いての引用はファクシミリに拠る。
8. ニコラス・ラヴは Bonaventure の作品とされてきた（実際は違う）*Meditationes Vitae Christi* のかなり自由な中英語訳、*The Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ* の'Die Jouis'（木曜日）の部分と巻末の'De Sacramento'において、聖餐式擁護、反ロラードの論陣を張っている。Michael G. Sargent, ed. 参照(pp.146-59；pp.225-41)。
9. 要約は Theodor Erbe, ed.の版本に基づく (p.173)。
10. Lee はこの写字生－もし存在したとして－が書いた箇所のフォリオ・ナンバーを誤っているようである(pp.1-2)。

11. 一方、『フローレンス』のオリジナルが書かれたとされる北部ミッドランドないしヨークシャーではロラード運動は低調であったと言われる (Rex, p.70)。しかし、ニコラス・ラヴがヨークシャーで反ロラードの論陣を張っていたことを想起すれば、イングランド北部のロマンスが原型段階で反ロラード的要素を持ち合わせていた可能性も否定できないであろう。

参考文献

Dalrymple, Roger. *Language and Piety in Middle English Romance*. Cambridge : D.S. Brewer, 2000.

Erbe, Theodor, ed. *Mirk's Festial*. EETS es 96. London : OUP, 1905.

Gordon, E.V., ed. *Pearl*. Oxford : Clarendon P, 1953.

Guddat-Figge, Gisela. *Catalogue of Manuscripts Containing Middle English Romances*. Munich : Wilhelm Fink Verlag, 1976.

Hartshorne, Charles Henry, ed. *Ancient Metrical Tales : Printed Chiefly from Original Sources*. London : William Pickering, 1829.

Heffernan, Carol Falvo, ed. *Le Bone Florence of Rome*. Manchester : Manchester UP, 1976.

Hudson, Anne. *The Premature Reformation : Wycliffite Texts and Lollard History*. Oxford : Clarendon P, 1988.

_____, ed. *Selections from English Wycliffite Writings*. rev. ed. Toronto : U of Toronto P, 1997.

Kölbing, Eugen, ed. *The Romance of Sir Beues of Hamtoun*. EETS es 46, 48, 65. London : Kegan Paul, Trench, Trübner, 1885-94.

Lee, Anne Thompson, ed. '*Le Bone Florence of Rome :* A Critical Edition.' Diss. Harvard U, 1973.

McSparran, Frances & P. R. Robinson, introd. *Cambridge University Library MS Ff.2.38*. London : Scolar P, 1979.

Macy, Gary. *Treasures from the Storeroom : Medieval Religion and the Eucharist*. Collegeville, Minnesota : The Liturgical P, 1999.

Rex, Richard. *The Lollards*. (Social History in Perspective) Basingstoke, Hampshire & New York : Palgrave, 2002.

Rubin, Miri. *Corpus Christi : The Eucharist in Late Medieval Culture*. Cambridge : CUP, 1991.

Sargent, Michael G., ed. *Nicholas Love's Mirror of the Blessed Life of Jesus Christ*. (Garland Medieval Texts 18) New York & London : Garland, 1992.

Severs, J. Burke, gen. ed. *A Manual of the Writings in Middle English 1050-1500*. Fascicule 1. Romances. New Haven : The Connecticut Academy of Arts and Sciences, 1967.

Vandelinde, Henry Lloyd. 'THE PRODIGAL ONES The Middle English Hagiographical

Romances: Genre Identity and Critical Evaluation.' Diss. Queen's U, Canada, 1995.
中世英国ロマンス研究会・訳.『中世英国ロマンス集　第四集』 東京：篠崎書林, 2001.